「保育学研究」　第４４巻第２号　２００６年１２月２５日　「日本保育学会」発行
「保育フォーラム」　テーマ「障害がある子どもの親の願いと保育実践」

「子どもは子どもの中で育つ」

(社福)あおぞら共生会　サポートセンターあおぞらの街　明石洋子(徹之母)

わが子（長男徹之）の障害があると知ったとき、「不幸な子を持つ不幸な親」と絶望し、将来を悲観しました。当時の私には、「障害＝不幸」と思えたのです。今、充実した人生を送っている３３歳の徹之を見ていますと、障害があること自体が不幸なのでなく、障害ゆえに生きる場が狭まれてしまうのが不幸なのであって、普通の方と同じように、選択肢が豊富な地域の中であたりまえに生きる場があれば、不幸ではないと確信ができます。
でも、当時の私は、「障害があれば、特別な場で訓練し、治らなければ特別な場（入所施設）で暮らす」、ゆえに徹之の将来は家族から切り離された「施設の中」と、徹之の不幸な行く末を悲しんだのです。しかし、幸いなことに、初めて出会って支援してくれた専門家から「ノーマライゼーション」の思想、すなわち障害があっても「地域の中であたりまえに生きてもいいのだ」と教えてもらい、徹之と共に地域に飛び出す勇気をもらいました。その第１歩として、私は徹之を「子どもの集団に入れたい」と思ったのです。

しかし、３０年前の日本は、「ノーマライゼーション」など浸透していませんでした。近隣の幼稚園７園全てが、超多動で言葉がない徹之を「手がかかる扱いにくい子」として拒否しました。それで私は川崎市相手に「統合保育＝障害児保育」の推進運動をしたのです。保育所に入れることが目的でなく入れた後が大事でしたから、保育士さんから提示された「障害児保育士の加配・障害児保育部会の設立・児童精神科医の巡回相談」の３つの条件を市と交渉し、昭和５２年にやっと念願の市立保育園に徹之は入ることができました。

現在、徹之は川崎市の公務員として働いて１４年目ですが、自閉症が治ったわけでも、知的障害が治ったわけでもありません。どうして公務員になり就労が継続できているかというと、周りの人が徹之を知って徹之の特性（障害でもあり個性でもある）を理解し工夫し支援して下さっているからです。足の不自由な方の車椅子の役目が、徹之にとっては「人」なのだと知った、そのスタートが、保育所でした。

２年間の保育所生活で「理解ある大人がパイプ役となり、素直に見本を示してくれる子

どもの存在があれば、徹之は微々たる成長かもしれないが、必ず人として成長し、支援を受けながらでも地域社会の中で生きていける」と思えたのでした。

特に同年齢の子どもの存在は、徹之の成長には不可欠でした。私は、徹之に何か教えるとき、「〇〇しようね」と子どもの目線で一緒に行動するよう心がけていましたが、本当のところ、いうことを聞かない徹之を叱ることが多く、同じように先生方も、勝手な行動をする徹之を、「並びなさい」などと注意をしていました。これは大人側の「困ること」なのですね。でも本当に困っているのは、徹之本人なのです。「何で困っているのか、なぜそうするのか」一緒にいる子どもたちは、それがわかるのでした。そして「並び方」の見本を示して（言葉でなく、見てわかるよう）、また手取り足取り（具体的に）、しかも細かく優しく（肯定的に）教えてくれました。子どもたちは当然お互いに「子どもの視点に立っている」のです。

また、「障害＝できないこと」、ゆえに「できないことをできるようにする」（障害をなくす）ことが、「徹之が幸せになる道」と信じていた私は、言葉の特訓をして、嫌われ、問題行動を増やして、失敗していました。その失敗から「人を見て、まねて、覚えて、人は人として成長する。それには人を好きになることが基本」と気がつきました。周りが快い関係にならないと徹之は人を好きにならないと思いましたので、周りに徹之の特性とかかわり方を説明して、快い環境を作るよう心がけました。人が嫌いだと見ようとはしません。また強制されたことはその場ではするかもしれませんが、主体的で自主的でない、納得していないことは、身につきません。また興味のないことは教えることができません。その点、徹之の興味を見つけるのに、大好きなクラスメートの存在は不可欠でした。子どもたちの行動に徹之の視線が行く、そのチャンスを見逃さず視線の先にある興味を見つけ、成長の手がかりとしました。本当に、「子どもは子どもの中で育つ」のですね。

先生方も、徹之が集団行動がうまくできないとき、「どう対応していいか困る（自分が困る）」という視点から、「状況がわからなくって困っている本人が、どうしたらみんなと一緒に行動できるか（徹之が困っている）」と言う視点で考えてくださるようになって、「わかるように教えよう」という発想に変わり、工夫されました。「そんなことしちゃだめ」とか「勝手なことをしない」、「きちんとしなさい」と言っても、具体的で視覚的でない言葉では、何が「そんな、勝手な、きちんと」なのか徹之にはわからないのです。大声で否定的な言葉には、混乱してパニックを起こすだけなのです。「徹之の視点に立って」考えてくださり、具体的・視覚的・肯定的なかかわり方を工夫され、クラスメートを常にモデルに

して、深い理解と、適切で豊富なかかわり方で、徹之を成長させて下さいました。

当時はまだ自閉症の原因も確固たる治療法も療育もありませんでしたから、先生方も「理論が先にありき」でなく、徹之の行動を観察して、対応策を試行錯誤しながらも親と相談して一緒に考えて保育してくださいました。保育所からスタートして、その後も、徹之の周りには、徹之を「知って理解し工夫して」下さる方が増え、おかげで、徹之はひょうきんで明るい性格に育ち、地域で暮らし、元気で働く大人になりました。

クラスメートにとっても、変わった行動をする徹之は面白いようで、ハプニングばかりの変化に富んだ日常を楽しんでいました（ハプニングは感動の源です)。人は顔かたちが違うように、みな違います。その違いが個性、人格と思っていますが、子ども時代はこの違いを素直に受け入れることができます。子ども時代に、自分と違っている人に出会い、想像力を働かせることが、感性をはぐくむようです。障害児と付き合うことによって、「どうしてそんなことをするのかな?」と考えることにより、人間性豊かな多様な価値観のある魅力的な人、コーヒーのコマーシャルではありませんが、「違いがわかる人」さらには「違いを楽しむ人」、そのような人になれるのではないでしょうか?

また、偏見や差別は知らないから起きるのであって、想像力が働く子ども時代に、「知る」ことを大切にして欲しいと思います。昨今の信じられないような若者の殺人事件など見聞きしますと、相手のことを思いやる想像力に欠けているのではないかと思われます。そのような事件を未然に防ぐには、小さいときから、違いを認め合う関係つくり、相手の立場を思いやる心を育てることが大事かなと思います。

私は、子育ての目標として、徹之にも健常の弟にも、「本人の思いを育て、意志を尊重し、自立する力を育てる」ことを大切にしました。「できる」ことを目標にしないで「幸せになる」ことを目標にしました。普通児にとっても「できる（成績１番)」ことが目標でなく、「学びたくなる」ことが、勉強する本当の意味なのではないでしょうか？最近の医師宅放火殺人事件をみても、「本当の幸せとは何か」を考えさせられます。勉強を教えることより大事なのは「思いを育てる」こと、そして親は、その「思いに寄り添って支援する」ことかもしれません。徹之を育てながら、あたりまえの人生があたりまえでなくなったとき、深く考え、「人として大切なものは何か」が見えてきたような気がします。

「違いがあってＯＫ、障害があってもＯＫ」の世の中になるためには、子ども時代の想像力の育成、障害に対する価値観等々、子どもの保育にかかわる保育士の皆さまの力が大きいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。